

永遠にわき出る泉

ヨハネ4:5~14、39~42 / 李正雨師

世の中には多くの宗教があり、宗教はみんなそれぞれの特徴を持っています。私たちキリスト教にも、他の宗教と違う特徴があるでしょう。では、私たちのキリスト教の特徴は何でしょうか。キリスト教は、何をこの世の人々に伝えているのでしょうか。他の宗教についてはよく分かりませんが、自己省察と悟りを通して自らが神となる宗教もあり、先祖が神になる宗教、神の教えに徹底的に従わなければならない宗教、様々な神の中から一人を選んで信じる宗教などもあります。しかし、私たちキリスト教は、これらの宗教とは違う立場をとっています。神が人のために働いて、犠牲になったからです。皆様をご存知のように、イエス様は天からこの世に来られ、私たちのためにご自分を犠牲にしました。人が神のために働いたのではなく、神が人のために働いたのです。人のために働いて犠牲になった神を信じること。これが私たちの信仰であり、キリスト教の特徴ではないでしょうか。今日の福音書にも、このようなキリスト教の特徴がよく示されています。

今日の福音書の背景は、サマリアです。当時のサマリアは、イスラエルの伝統と遺跡を持っていましたが、ユダヤ人からは、排除された場所でした。これは血統の問題でしたが、過去サマリアとユダヤは、イスラエルという一つの国でした。政治的な問題によって、北イスラエルと南ユダに分かれ、北イスラエルは、王族ではなく貴族によって、南ユダは、王の血統によって国が立てられました。南と北が分かれて長い時間が経ちましたが、一つの国にはならず、それぞれが他の国によって支配されるようになりました。この時、南ユダとは違って北イスラエルは、他の民族との結婚、すなわち雑婚が盛んであり、これは血統を大切に思った南ユダから排斥される大きな理由となりました。このような歴史的な葛藤は、イエス様の時代まで続いてきて、同じ根の民族であっても、お互いを憎み、対立していました。まるで、今の韓国と北朝鮮のように、様々な葛藤を招いていたのです。

このような状況の中で、イエス様はサマリアの方に行かれました。イエス様は、ダビデの血統として南ユダの人です。当時の状況で、南ユダの人がサマリアに行くとは、珍しいことでした。しかし、イエス様はサマリアに行かれ、今日福音書の背景になるサマリアのシカルという町に入られます。今日の福音書5-6節の言葉です。「ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。」この節では、イエス様が行かれた町の名前だけでなく、その町についての説明も書かれています。「ヤコブがその子ヨセフに与えた土地」、「ヤコブの井戸」と書いてありますが、個人的な考えでは、これは著者の意図、サマリアとユダヤが違う国ではないということを示そうとした著者の考えが入ったことだと思います。もちろん聖書に書かれていない伝承があったため、著者がこれを記録したこともあります。しかし、同じ祖先の名前を紹介したのは、サマリアとユダヤの根が同じであることと、両国とも神様が選ばれた国、民であることを示したことだと思います。それでイエス様は、ユダヤ人の所だけではなく、サマリア人の所にも行かれたのです。

イエス様はこの井戸のそばで、ある女と出会われます。そしてその女に「水を飲ませてください」と言われます。すると、女はイエス様にこう答えます。9節の言葉です。「『ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか』と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。」この女の答えは、当時のユダヤ人とサマリア人の関係をよく示していると思います。ユダヤ人がサマリア人に話しかけたり何かを頼んだりするのは、一般的ではありませんでした。しかもミシュナという口伝律法集によると、サマリアの女を汚れた者として扱います。これは、宗教的な理由なのか、他の民族との雑婚によってこのような言葉が生じたのかはよく分かりませんが、当時のユダヤ人は、サマリアの女を汚れた者と思っていたということが分かります。しかしイエス様は、サマリアの女に話しかけ、水をくださいと頼みました。これは、イエス様がユダヤ人としてサマリアに行かれたのではないということを教えて

いると思います。単に、民族間の対立と葛藤を解消するために行かれたのではなく、サマリアに救いが臨まれたことを、神様がご自分をサマリアに赴かせたことを示しているのです。10節でイエス様はこう言われます。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」

イエス様は、ご自分が誰なのか、ご自分が何を与えるためにサマリアに行かれたのかを言われます。当時の神の賜物というのは、トーラー、律法を意味しました。しかし、イエス様が言われている神様の賜物は、律法ではありません。律法以上のもの、神の霊と愛と永遠の命など霊的なものをおっしゃっているのです。イエス様は、これを生きた水と表現していますが、これについては、14節に詳しく書かれています。「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」先週の説教の中で、律法は、あくまでも肉のためのものだと申し上げました。だから、律法を通して神様の国を見ようとしたニコデモは、新たに生まれることを理解できませんでした。しかし、イエス様がおっしゃった神の賜物、生きた水は霊のためのものであり、霊の必要を満たすのです。神の国を見させ、救いを得させるのです。イエス様は、これをサマリアに与えてくださるため、ユダヤ人ではなく神として行かれたのです。そして、口伝律法集であるミシュナが汚れたと扱ったサマリアの女と出会ったのです。律法によると、汚れた女と出会ったイエス様も、汚れるしかありませんでした。しかし、イエス様が汚れたのではなく、女が救われました。これは、どの律法でも、神の愛、神の働きから私たちを妨げることはできないというのです。すべてのことを越える神様の愛がサマリアに臨まれたのです。そしてその愛は、永遠にわき出る泉になり、サマリアを導くのです。

キリスト教をこの世の人々にどう説明したらいいのか。今日の福音書は、この質問について最高の答えになると思います。イエス様が自らサマリアの女を訪ねたように、神様も自ら私たち人々に来られるのです。そして、私たちにこの世が知らない永遠の泉を与えられるのです。これを受け入れる者は救われ、永遠の命を得ることができます。私たちが行うことは、何もありません。ただ私たちに来られた主を受け入れ、感謝の生活を過ごせば良いのです。今日の福音書40-41節はこう語っています。「そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるように頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。」イエス様に頼めば、聞いてくださいます。私たちと共におられるように、御言葉を聞いてくださるようと祈れば、イエス様は私たちと共におられ、私たちの信仰をより深くしてくださいませ。そして、その中で私たちは、天の国を見ることができるようです。

先週の福音書のニコデモは、今日の福音書のサマリアの女とよく比較されます。ファリサイ派の人であり、ユダヤ人の議員であった彼は、律法学者としてユダヤ人のリーダーでしたが、霊的なことは何も悟りませんでした。しかし、サマリアの女であり、夫は5人もいて、暑い正午に水をくむために井戸に来た彼女は、神の賜物を受け、人々にイエス様を伝える人になります。これは、この世のどんなものでも、私たちの霊を満たすことができないということです。この世のものは、私たちにまた渇かせるのであり、神の国を見えないようにするのです。イエス様のみが、私たちに来られたイエス様のみが私たちのすべてを満たし、私たちの中で永遠にわき出る泉になってくださるのです。四旬節を過ごしている私たちに、今日の福音書は、私たちのところに来られたイエス様について教えています。そしてそのイエス様と共にとどまることを教えています。イエス様を受け入れ、イエス様と共におられる皆様になりますように。私たちに渇かせない泉が、毎日私たちの中でわき出ますように、主の御名によって祈ります。アーメン